

柳澤壽男福祉ドキュメンタリー映画祭 第3回

ぼくのなかの夜と朝

日時●2022(令和4)年8月21日(日) 2回上映

①10時30分～12時30分 ②13時30分～15時30分

入場料●300円(当日のみ。資料代含む)

会場●藍住町総合文化ホール 大ホール

771-1203 徳島県板野郡藍住町奥野字矢上前32-1

☎088・637・3344

主催●徳島で柳澤壽男監督作品をみる会

(代表=NPO法人太陽と緑の会 ☎088・642・1054)

共催●藍住町総合文化ホール

●柳澤壽男監督(1916～1999、享年83)は、近年高く再評価されているドキュメンタリー映画の巨匠です。小川伸介、土本典昭、黒木和雄などの優れた監督が尊敬したことでも知られます●特に福祉ドキュメンタリー5部作は、障がい者問題を静かに見つめ、色あせない問題提起を我々に投げかけてくる力強い作品で、東京や神戸などで上映会が行われています●映画史的には2018年に新宿書房から分厚い資料集『そっちやない、こっちや 映画監督・柳澤壽男の世界』が刊行されたことで、その作品評価はゆるぎないものになりました●この企画は、監督の弟子筋にあたる太陽と緑の会・杉浦良が、天国の師匠に捧げる渾身企画です●徳島で5年間かけて柳澤福祉ドキュメンタリー5部作を藍住町総合文化ホールで上映する試みです。多数ご参集ください。

アクセスマップ

🚌 徳島バス藍住線…「藍住役場前」停留所より徒歩5分

🚆 JR線…「勝瑞」駅下車後、車で10分

🚗 徳島自動車道…藍住ICより、車で7分

🚗 高松自動車道…板野ICより、車で7分



駐車場案内図



※駐車場の台数には限りがあります。乗り合わせてのご来場にご協力をお願いします。

お問合せ

藍住町総合文化ホール

〒771-1203 徳島県板野郡藍住町奥野字矢上前32-1

TEL 088-637-3344 FAX 088-637-3345

利用時間…9:00～22:00

受付時間…9:00～18:00

休館日…第4月曜日(祝日の場合は開館)。

12月28日から翌年1月4日まで

ぼくのなかの夜と朝

製作者=今野正巳、浮田洋一
脚本構成=大沼鉄郎/監修=近藤文雄
演出=柳澤寿男/演出助手=若山晴之
撮影=石井尋成
撮影助手=秋山洋、長田勇
音楽=松村禎三/編集=高橋春子
録音=大橋鉄矢
ナレーター=伊藤惣一
歌=ひばり児童合唱団、皆川おさむ
撮影協力=株式会社東北映画製作、
仙台放送、東北放送
録音スタジオ=アオイススタジオ
現像所=東洋現像所
1971年/16ミリ
カラー/100分

西多賀病院ベッドスクールの筋ジストロフィー児
130人の療育記録。



■ 私たちはなぜこの映画を作ったか
世の中には、長い病気に苦しみ、学校にもいけないで困っている子がたくさんいます。なかでも、進行性筋萎縮症という不治の病に冒された子どもたちのことをきくと、私たちの心は暗くなります。現代の医学はこの病気の進行を止めることもできないので、この子たちが瘦せ細って衰えていくのをただ見守るばかりです。西多賀病院のベッドスクールには、この病気の子どもが三〇人もいます。

ほとんど、どうしようもなく悲しい事態がここにあります。そこから私たちは、ついで目をそむけたくありません。しかし目をそむけることで私たちは不幸から縁を切ることができるとはどういうか。私たちは、この疑問から出発します。そして、個人の不幸と社会の不幸を考え、しかもそれを自分自身の問題として考えざるをえないような、そういう映画を作りたいと考えました。

この子どもたちが人間らしく生きる権利をうばわれ、あるいは制限されているならば、それは私たち大人がしたことです。それを放置しておくということは、私たち自身が、自由に生きる権利をうばわれ、制限されていることを放置していることです。この子どもたちが不自由に苦しんでいること、この病気がおせないこと、それは私たちが作りあげた文明の恥辱といえます。この子どもたちの不自由、不幸は、同じ社会に住む私たちの不自由であり不幸ではないのでしょうか。

■ 製作過程

この映画は、なお現在、社会の裏側におしこめられている身障児・病弱児の問題にとりくんできた人々の熱意によって、製作がはじめられました。

演出の柳澤寿男は、前作に「夜明け前の子ら」(近江学園の重障児療育を扱ったもの)があり、監修の近藤文雄は、長い間病弱児、心身障児特に筋ジストロフィーにとりくんできた医学者であり、製作の今野正巳は病弱・心身障児の社会福祉をすすめる、西多賀ベッドスクールの設立に力をつくしてきています。だが、この映画は、全国三万人有余の製作協力会員と多くの団体の力があってはじめて完成しました。

製作には、この問題に共感した映画人が参

加し一九六九年夏からシナリオの作製がはじまり、秋にクランクイン。七万フィートのフィルムを使用し、録音したテープは二〇〇時間におよび、一九七〇年一〇月に完成しました。

■ 製作者の会話より

原爆症
ベトナム戦争のもたらす死
化学兵器による疾患
水俣病
イタイイタイ病
炭じん爆発の後遺症
それらは原因が人為的ではっきりしている筋ジストロフィーとは関係がないといえるだろうか
私たちは、この映画の根底に共通する悲慘をつかみたいのだ
人間が人間を差別し
侮辱し 虐殺する
その根もとを突き崩したいのだ
すべての病弱・心身障害に共通する筋ジストロフィーに於てもさぐりたいのだ

● 朝日新聞・評より

筋ジストロフィーと戦う少年たちを描いた記録映画「ぼくのなかの夜と朝」は、子供たちを淡々と描くだけではなく、人生や教育のあり方を考えさせるほどの内容である。

この作品のナレーションには西多賀ベッドスクールの生徒自身の詩が多く使われている。十歳をこえた子の多くは、自分がもう数年しか生きられないことを知っている。柳澤演出はこの点に光を当てて訴える。この子たちの生きる意味は何か。この子たちの学ぶ意義は、どうして人間は生まれたか。どうして学ぶのか。五十年の生と二十年の生に価値の差があるのか。

● 毎日新聞・評より

「あなたは施設をみに来たのか、それとも私たちをか」と鋭く問いかける子供たち。医者や担当者が専門の立場ばかり振り回す時代ではない。国民全部で考えなければいけない問題だ。